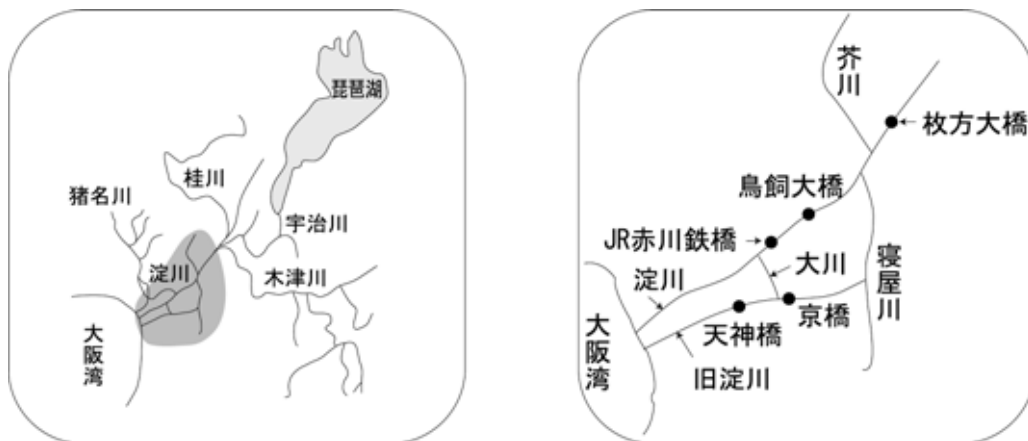


5. 淀川

三川からなる淀川の水質は、合流後ただちに混合しないことから各支川の特徴を反映して、桂川の影響を受ける右岸の方がより汚濁が進んでいた。しかし、昭和50年代中頃よりその差はほとんどなくなってきている。これは桂川の水質の改善と、枚方市内河川からの左岸側への汚濁負荷の増加による水質悪化のためである。

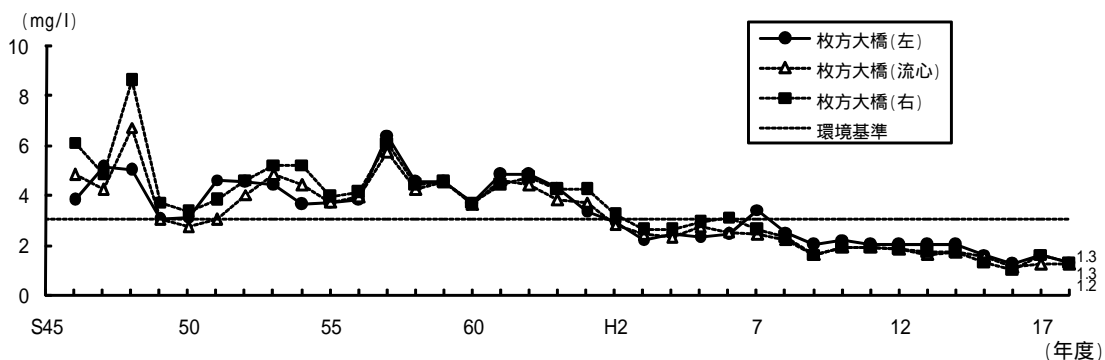
大阪市内の河川は概して自己流量が少なく、また大部分が感潮区間であるため、よどみがちで自浄能力があまり高くなく、昭和40年代の淀川上流域の急速な市街化進展により水質汚濁が進行してきた。近年は、工場排水規制強化や下水道整備等の促進によって、その水質が改善されてきた。しかし、依然として他の河川に比べると汚濁している。



(1) 淀川上流

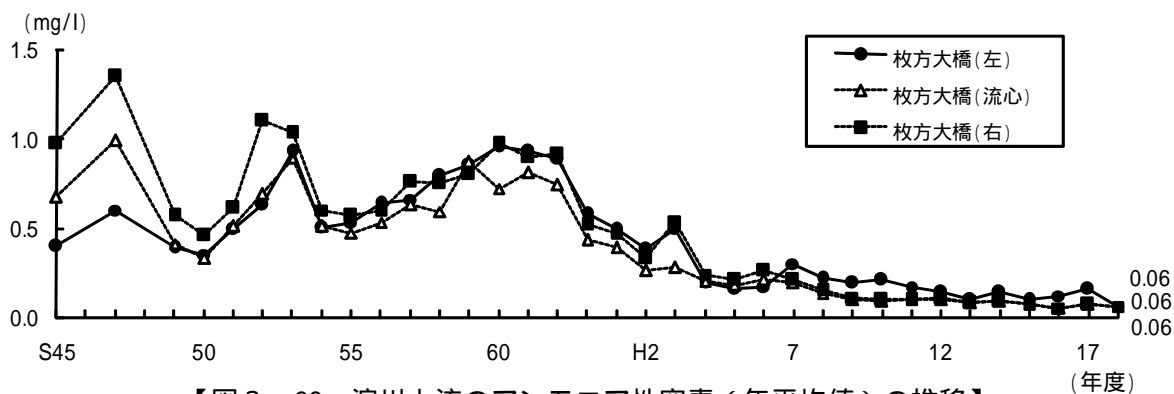
枚方大橋の左岸、流心、右岸でのBOD(75%値)は昭和57年度に5.0mg/l程度の高い値を示した後改善されてきており、平成18年度は、左岸で1.3mg/l、流心で1.2mg/l、右岸で1.3mg/lであり、環境基準値(3.0mg/l)を下回っている。

アンモニア性窒素(年平均値)は、昭和60年度に水質が悪化し0.72~0.97mg/lを示したが、以後急速に改善され、平成18年度には0.06mg/lと改善されている。



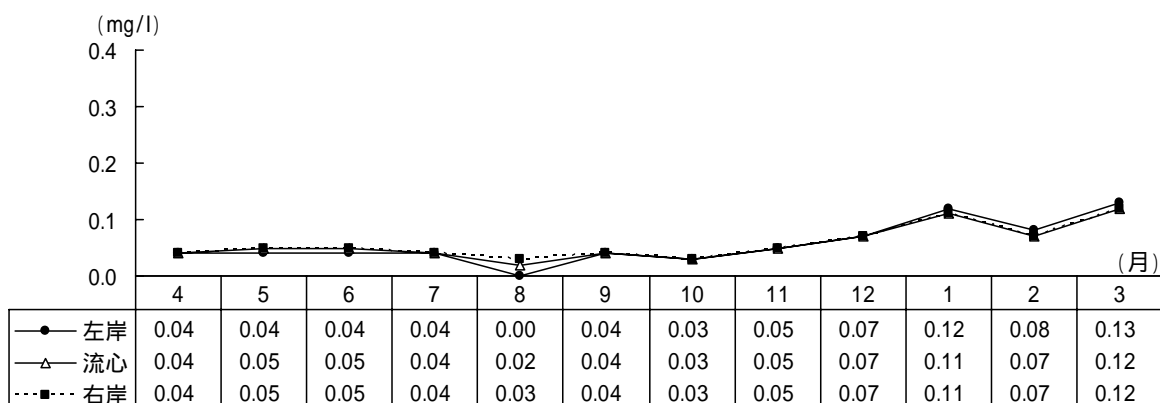
【図3 - 37 淀川上流のBOD(75%値)の推移】

「大阪府公共用水域等水質調査結果(ホームページ)」より作成
詳細は資料3 - 10を参照



【図3-38】淀川上流のアンモニア性窒素（年平均値）の推移

大阪府環境白書より作成
 ただし、平成11年～18年度は「大阪府公共用水域等水質調査結果（ホームページ）」より作成
 詳細は資料3-11を参照



【図3-39】淀川上流（枚方大橋）のアンモニア性窒素（平均値）の経月変化（平成18年度）

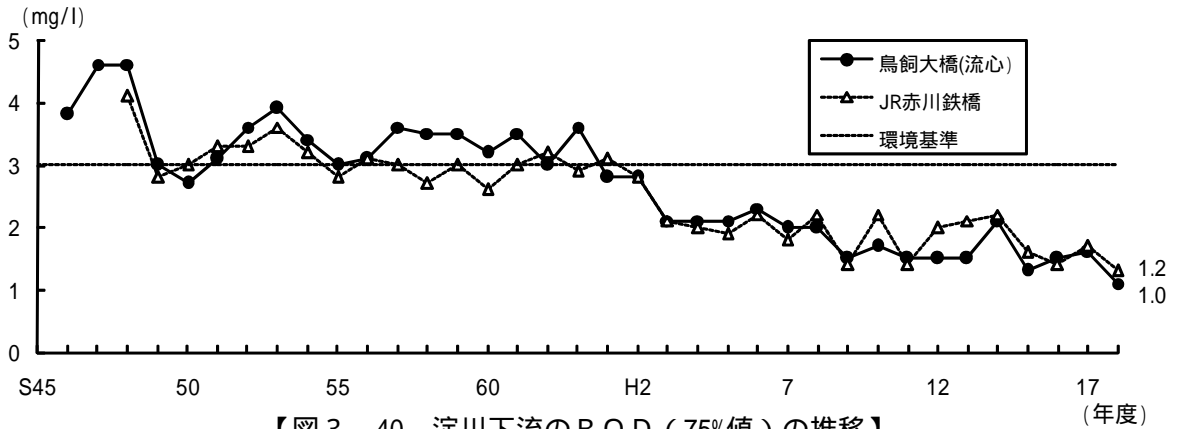
大阪府環境農林水産総合研究所「大阪府公共用水域等水質調査結果（ホームページ）」より作成

(2) 淀川下流

淀川下流の鳥飼大橋流心およびJR赤川鉄橋でのBOD(75%値)は、昭和40年代後半から徐々に改善されてきている。平成18年度は、鳥飼大橋流心で1.0mg/l、JR赤川鉄橋で1.2mg/lであり、環境基準値(3.0mg/l)を下回っている。

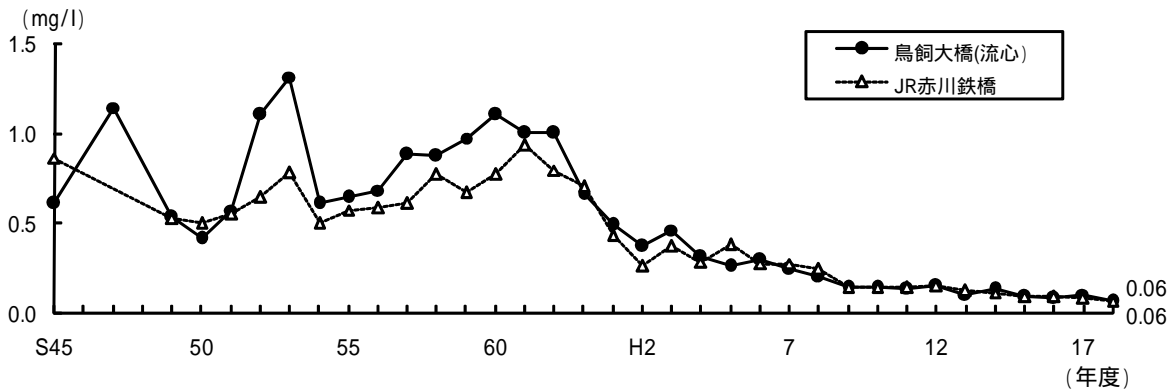
鳥飼大橋流心でのアンモニア性窒素(年平均値)は昭和60年度に1.1mg/lであったが、昭和62年度以降急速に改善され、平成18年度は0.06mg/lであった。JR赤川鉄橋においても同様の傾向であり、平成18年度は0.06mg/lであった。

鳥飼大橋でのアンモニア性窒素の経月変化をみると、枚方大橋同様、冬場に高くなる傾向がある。



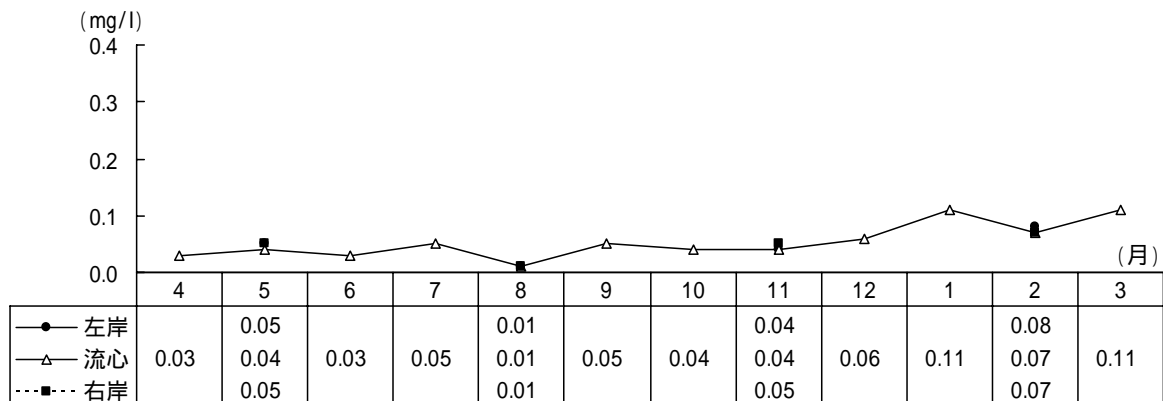
【図3 - 40 淀川下流のBOD (75%値) の推移】

「大阪府公共用水域等水質調査結果 (ホームページ)」より作成
 詳細は資料3 - 10を参照



【図3 - 41 淀川下流のアンモニア性窒素 (年平均値) の推移】

大阪府環境白書より作成
 ただし、平成11年～18年度は「大阪府公共用水域等水質調査結果 (ホームページ)」より作成
 詳細は資料3 - 11を参照



【図3 - 42 淀川下流（鳥飼大橋）のアンモニア性窒素（平均値）の経月変化（平成18年度）】

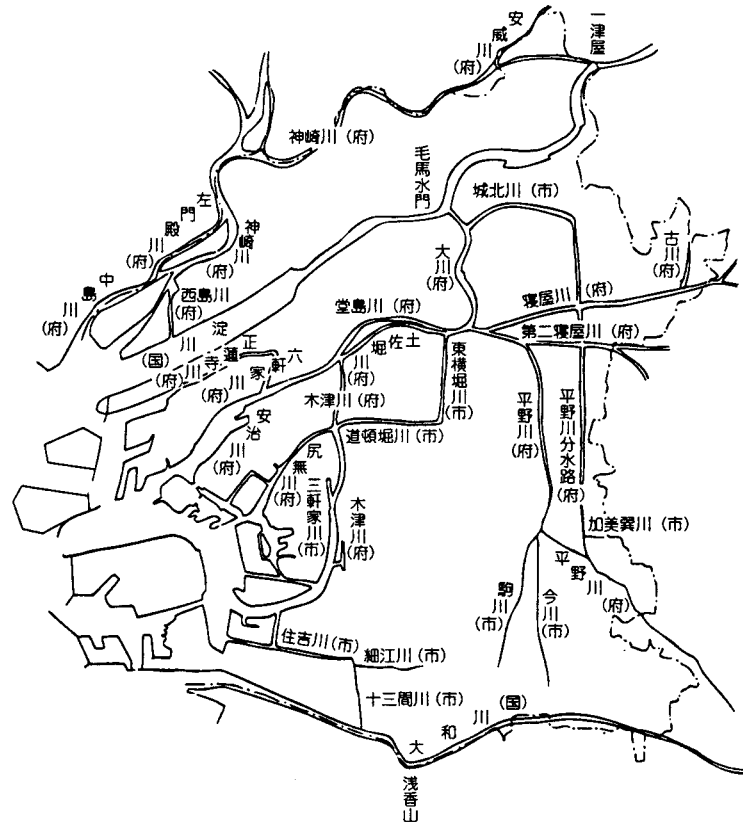
大阪府環境農林水産総合研究所「大阪府公共用水域等水質調査結果（ホームページ）」より作成

(3) 大阪市内河川

大阪市内河川のBOD（75%値）は昭和40年代中頃まで非常に高い値を示していたが、その後は改善傾向を示している。平成18年度は、神崎橋で2.0mg/l（環境基準値3.0mg/l）であり、環境基準値を満たしている。一方、京橋は8.3mg/l（環境基準値8.0mg/l）、天神橋（堂島川）は3.1mg/l（環境基準値3.0mg/l）、天神橋（土佐堀川）は5.6mg/l（環境基準値5.0mg/l）であり、環境基準値を上回っている。

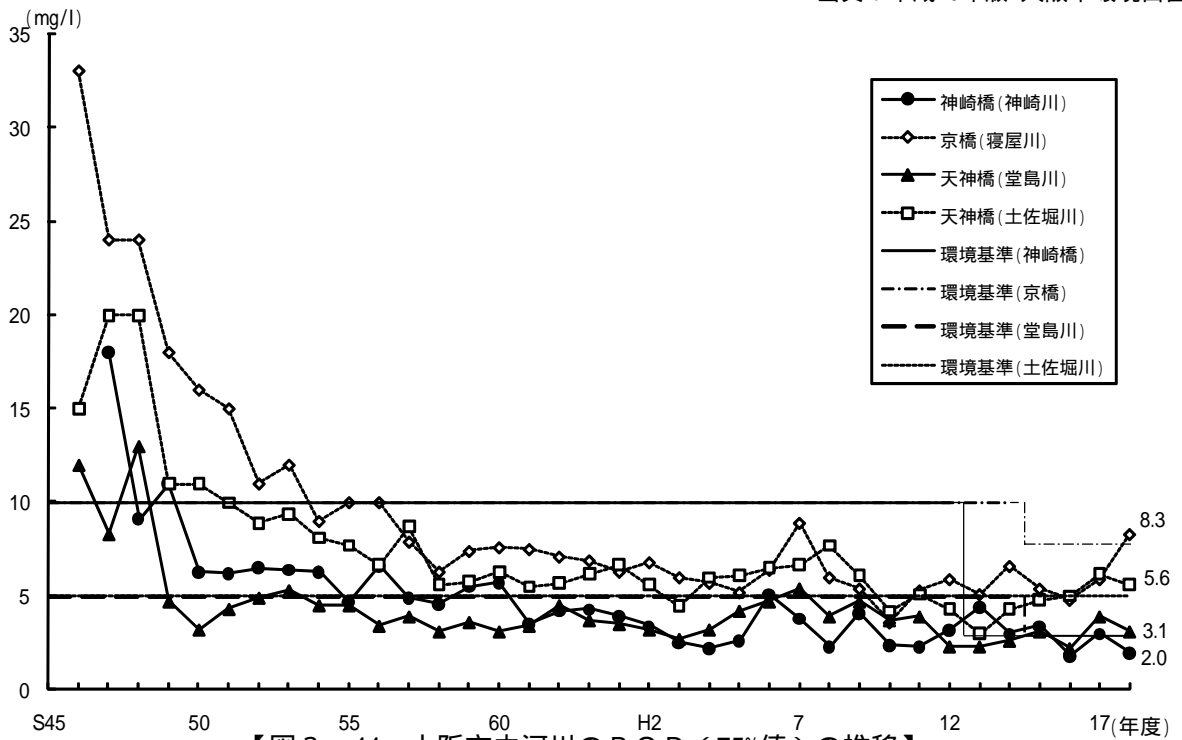


【大阪市内河川（大阪城付近）】



【図3 - 43 大阪市内河川】

出典：平成19年版 大阪市環境白書



【図3 - 44 大阪市内河川のBOD（75%値）の推移】

「大阪府公共用水域等水質調査結果（ホームページ）」より作成
 詳細は資料3 - 10を参照